

だれもみんな笑顔になったことは同じであった。
女の子は、進くんたちの前にも来て、
「おにいちゃん、おはようございまちゅ。」
と、あいさつした。頭につけた赤いリボンがゆれ
ていた。さすがの志郎くんも、返事に困^{こま}ってもじ
もじしている。

女の子のお母さんは、それをにこにこしながら
見ていて、

「このごろ、あいさつの言葉を覚えたのね。人を
見ると、ああしてだれにでもあいさつするのよ。
はずかしくて……。」

と、そばに立っているお父さんに話しかけた。お
父さんは、

「いいじゃないか。かわいらしくて。」

と言って、にこにこしている。進くんもなんだか
明るい気持ちになった。

21 とぶ道ひとすじ

「走ることに、とぶことに、どちらのほうがぼく
にむいているだろうか。」

と、織田^{おだ}幹雄^{たけお}は考えた。

今は中学二年生だが、幹雄は小学生のころから
走るのが得意だった。体は他の者よりも小さいほ
うで、小さい方から数えて五、六番めぐらいだっ
たが、走るときは、大きな友達をぬいて、いつも
一番をあらそっていた。

そうして、広島一中に入ってから、二年生のと
き行われた広島と宮島間の十マイル競走では、
全校の上級生たちもみんなぬいて、みごとトッ
プ。しかもタイムは新記録をつくって優勝^{ゆうしょう}
した。

やがてバスがきて、進くんも女の子たちもそれ
に乗りこんだ。一番に乗った進くんたちがこしか
けていると、あとから女の子がきて、座席^{ざせき}がなく
てうろろうしていた。進くんは、それを見ると、
さっと立ちあがって、

「ここへかけてください。」

と、お母さんに言った。女の子は、

「おにいちゃん、ありがとう。」

と言って、お母さんに助けられて、ちょこんと座
席にこしかけた。

進くんは、バスにゆられながら、さつき女の子
にあいさつされたときから、快い気持ちが続いでい
ることに気付いていた。そして、「だれにでもあ
いさつするのがはずかしくて……。」と言った若
いお母さんの言葉が、みように心にかかっていた。

「織田はいいランナーだなあ。」

と、みんな感心した。それで、次の年の秋、師範^{しはん}
学校の運動会で、広島じゅうの中学校を招待して行
われる八百メートル競走に、一中を代表する選手
に選ばれて出場した。

「織田、しっかりやれ。」

と言われて、幹雄はうなずいたが、胸^{むね}の中には不
安な気持ちがひそんでいた。なぜなら、その前の
日に、一中では、広島、宮島間の十マイル競走が
あったからだ。それを休むことができず、次の日
のことを気づかないながらも、仕方なしに出場して
走った。そうして、二日続いて今日のレースに出
てきたのだったが、体はきのうのつかれがひどく
残っていた。

「これでは、とても勝つのは無理だ。」

と思った。しかし、母校一中のマークのついたユ

ニホームを着ているので、どうしてもがんばらなければならぬ。

「よし、死にもものぐるいでやってみる。」

と、齒を食いしばって走った。

しかし、その結果は、最後から二番めという、生まれて初めてのみじめな負けかたをした。

この失敗のあとで、幹雄は、

「スポーツは、精神力も大切だけれども、体の調子も考えないでむちゃくちゃにやっては、決して本当の力を出すことはできない。合理的にやらねばならぬ。」

ということをつくづく思ったのだった。

そういう失敗は一度だけで、その他のレースでは、いつも一位をうばっていた幹雄だった。

ある日、学校で、体操の先生が数人の生徒たちをよびあつめて、

「きみたちは、こんど冬休みに、陸上競技の講習会があるから、それに行きなさい。」

と言った。

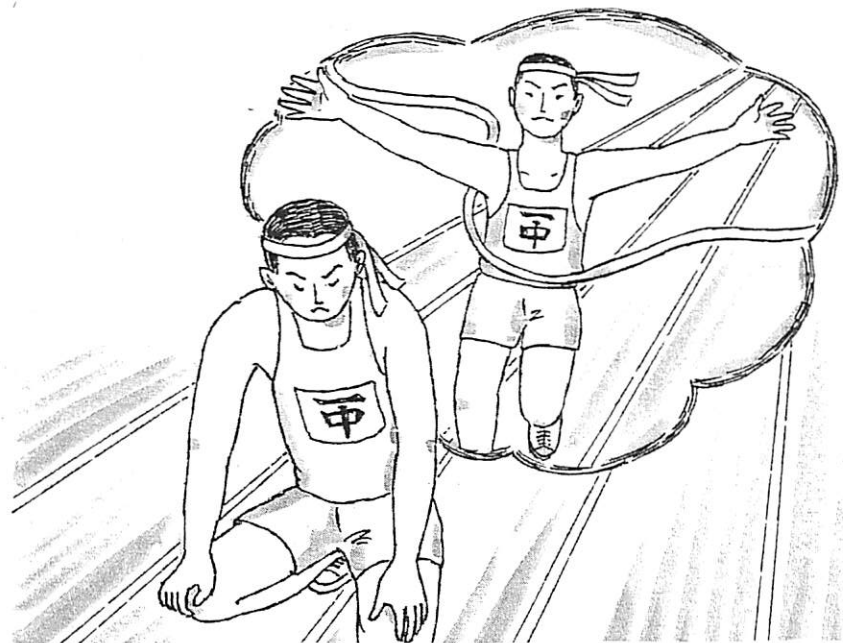
そのころの日本（今から七十年ほど前）では、まだ陸上競技という言葉もめずらしい時代だった。それで、幹雄は、なんのこともよくわからないままに講習会へ行った。講師で来ていたのは、第七回オリンピックに出場した野口源三郎という有名な人だった。

みんなは、まず、野口さんから、走ることやとぶこと、やり、砲丸、円盤を投げることなど、いろいろな競技のテストを受けた。

幹雄は、走ることととぶことをやってみた。

野口さんは、

「ふうむ、きみは、とぶのがよい。跳躍を習いたまえ。」



と言った。

幹雄は、ちょっと首をかしげた。とぶことを習うのはうれしかったが、それと一っしょに走ることもやりたい気がしたのだった。

「ぼくは、どちらもやれるのだがなあ。」

と、胸の中で思ったが、

「しかし、両方をいっしょにやっては、あぶはちとらずつになるのだろう。そうだ、やっぱり野口先生の言うとおりで。」

とうなずいて、跳躍のほうを習うことにした。

講習の最後の日に、

「さあ、今日は思い切りとぶんだぞ。」

と言われて、幹雄は、走り高とびで力いっぱいとんでみた。

自分の身長よりも高いバーをみごとにとびこした。

見ていた人たちはびっくりした。一メートル六十で、そのころの日本記録一メートル六十七に近い記録を中学生が出したのだった。

「ふうむ。」

と、野口さんもうなずいて、

「きみは生まれつき足のバネがよくきくようだ。

しっかりやれば日本の一流選手になれるぞ。」

と言っではげました。

それで 自信をつけた幹雄は、

「よし、これからは、跳躍の道ひとすじに進んで

みよう。」

と決心した。

そののち、幹雄は、「跳躍場の虫」になってしまった。昼の休みも放課後も、一日も休まず、跳躍の練習をくりかえした。雪のふる寒い日も、ユニホーム一枚でやった。そんな練習のおかげで、四

年生になったころには、一メートル七十以上をとべるようになって、日本記録はなんなくやぶっていった。

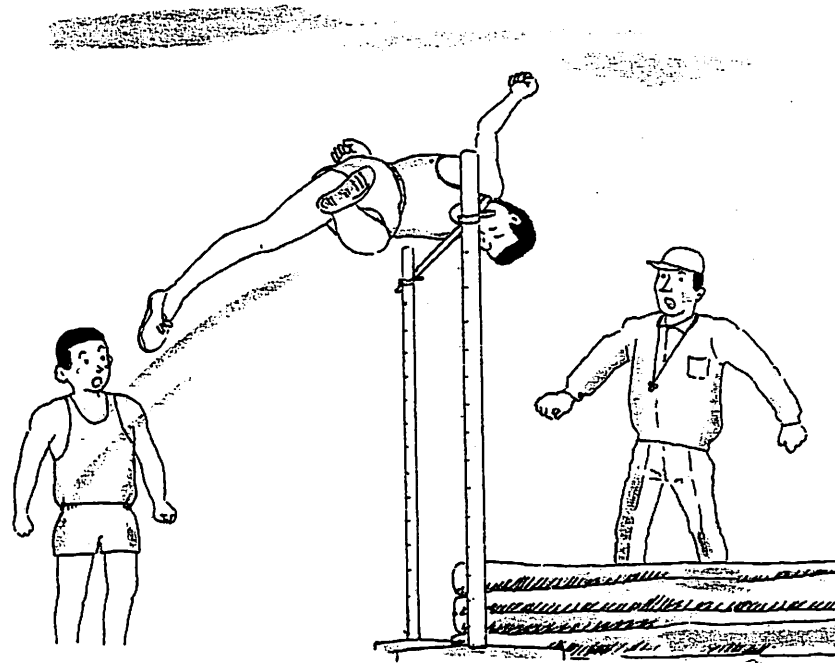
次の年の秋、極東大会の予選に出場して、走り高とびで一メートル七十三の日本新記録を作り、走り幅とび、三段とびにもよい記録を出した。

それから、早稲田大学に入り、第八回オリンピック大会に日本代表選手として出場し、三段とびで六位になった。日本選手が陸上競技で入賞したのはこれが初めてだったが、

「これで満足してはならない。次のオリンピックには、ぜひ、日の丸の旗をあげたいものだ。」

そののち四年間、織田選手は、オリンピックをめざして、厳しい練習を重ねた。

「ただむやみにとびつづけるのではなく、理にかなった練習をしなければならぬ。」

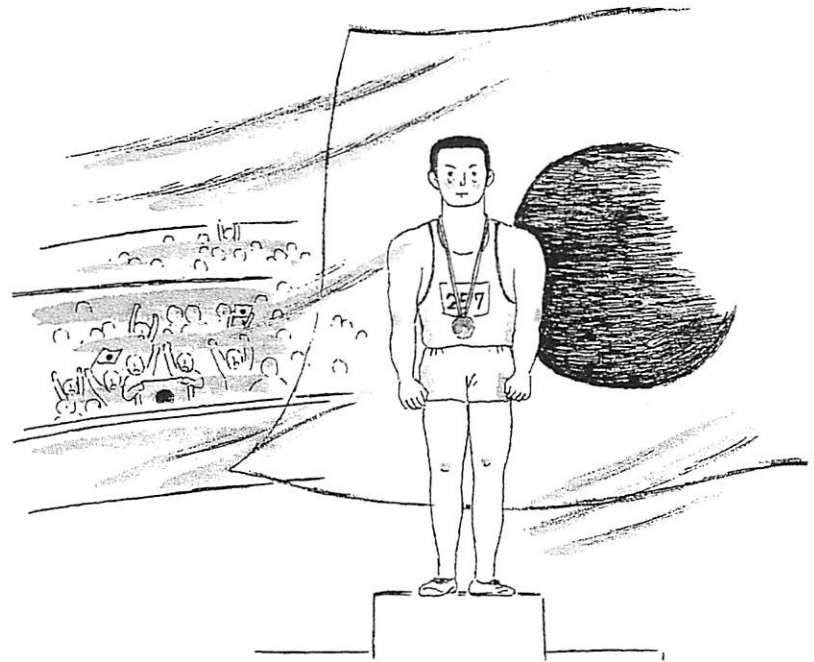


と考えた織田選手は、毎日、自分がどれだけとんだか、その記録をひとつ、ひとつ、細かくしるしつづけて、進歩のあとを調べたり、フォームを人に見てもらって、いろいろ研究する科学的な練習をこつこつやった。

やがて、いよいよ待ち望んだ日があった。一九二八年八月、織田選手はオランダのアムステルダムでひらかれた第九回オリンピック大会に出場した。陸上競技の三段とびが行われる日、スタンドで見ている日本人たちも、みんな胸をおどらせていた。日本がオリンピックに参加してから、すでに十六年。今度は五度めの出場だったが、まだどの競技にも優勝した選手はひとりもなく、日の丸の旗があがったことは一度もなかった。

みんなが三度ずつとんで、成績が掲示板に発表された。

「第一位、二百五十七番、十五メートル二十一。」
二百五十七番は織田選手の番号だった。
わあっというどよめきと拍手がわき起こった。
やがて、表彰式が始まり、マストの中央に、
すると日の丸の旗があげられて、楽隊が日本
の国歌を吹奏した。表彰台で金メダルを受けとっ
て、日の丸の旗を見あげた織田選手の目にはなみ
だが光っていた。



22 よだかの星

よだかは、実にみにくい鳥です。顔は、ところ
どころ、みそをつけたようにまだらで、くちばし
は平たくて、耳までさけています。足は、まるで
よぼよぼで、一間（一・八メートル）とも歩け
ません。

ほかの鳥は、もう、よだかの顔を見ただけでも、
いやになってしまおうというぐあいでした。たとえ
ば、ひばりも、あまり美しい鳥ではありませんが、
よだかよりは、ずっと上だと思っていましたので、
夕方など、よだかにあうと、さもさもいやそうに、
しんねりと目をつぶりながら、首をそっばへ向け
るのでした。もつとちいさなおしやべりの鳥など
は、いつでもよだかのまっこうから悪口をしまし

た。

「へん。また出て来たね。まあ、あのざまをこら
ん。ほんとうに、鳥の仲間のつらよごしだよ。」
「ね、まあ、あの口の大きいことさ。きつと、か
えるの親類が何かなんだよ。」

こんな調子です。おお、よだかでないただのた
かならば、こんなまはんかの小さい鳥は、もう
名前を聞いただけでも、ぶるぶるふるえて、顔色
を変えて、からだをちぢめて、木の葉のかけいで
もかくれたでしょう。ところがよだかは、ほん
うはたかの兄弟でも、親類でもありませんでした。
よだかは、あの美しいかわせみや、鳥の中の宝石
のような蜂（はち）すずめの兄さんでした。蜂すずめは花
の蜜（みつ）を食べ、かわせみはお魚を食べ、よだかは羽
虫をとって食べるのでした。それによだかは、す
るどい爪（つめ）も、するどいくちばしもありませんでし

21 とぶ道ひとすじ

1—(6) 自分の特徴を知って、悪い所を改めよい所を積極的に伸ばす。(個性の伸長)

①主題設定の理由

〈ねらいとする価値について〉

広い世界にただ一人しかいない自分、悠久の時間の流れの中であって、たった一回きりの人生。そうであるから自己のもつ可能性を十二分に発揮できる人生でなければ生きていく意味もない。その自分の優れた可能性を伸ばすためには、まず自分の長所をしっかりと見いださねばならない。

小学校生活の最後の学年で、自分自身を改めて見つめ、自己の良さを再認識し、その長所をひたむきな努力で伸ばしていこうと意欲を高めたい。

〈子どもの実態について〉

6年生のこの時期になると、対人関係に対する考えも深まってくる。そして、他者の性格の違いや友達の好きなど、嫌いなところなどを見付け出すことに強い関心を示すようになる。だが、自分の特徴を正しくつかむまでには至っていない。過信やうぬぼれは禁物であるが、自分の良さには自信をもち、個性としてい

っそう磨き伸ばしていこうとする意欲を育てたい。

〈資料について〉

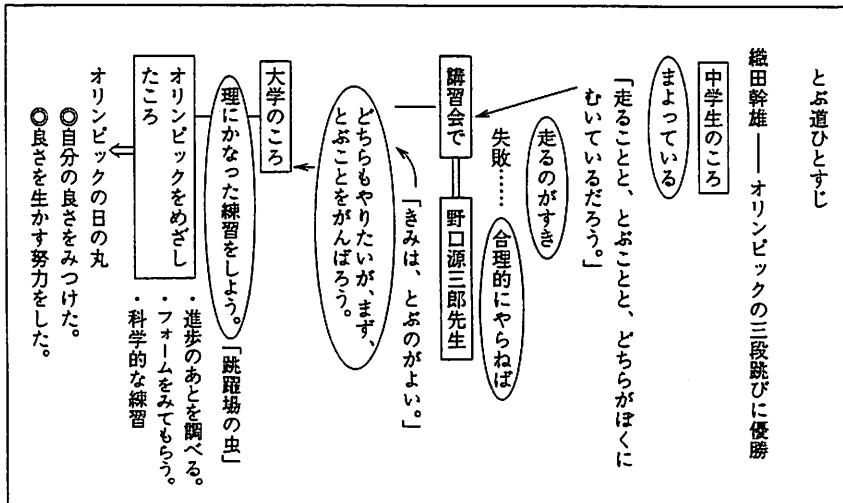
本資料は、わが国陸上競技界の花形、織田幹雄さんが、野口源三郎先生の適切な助言により、自分の特性を見だし、跳ぶ道を選んで努力に努力を重ね、第九回オリンピック三段跳びに日の丸を掲げるまでの精進を書いた感動物語である。大きく三つの場面に分けることができるが、それぞれの場面で主人公が自分の特徴を知り、それを伸ばそうと努力する姿をとらえさせたい。

また、「失敗のあとで、ただむちゃくちゃにやったのではほんとうの力を出すことができない。理にかなった練習が必要だ。」という織田選手の実感にみちた反省のこぼれを取り上げ、自分の生活との距離をちぢめさせ、努力への希望をもたせるように扱いたい。

②ねらい

自分の特徴を知り、長所を積極的に伸ばそうとする意欲を高める。

□板書



③展開

学 習 活 動	支 援 上 の 留 意 点
<p>(1) 自分のどんなところが長所だと思うか、発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・野球が友達よりも上手にできる。 ・係活動や当番を忘れずにやっている。 <p>(2) 資料「とぶ道ひとすじ」を読んで、織田幹雄の生き方について話し合う。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 主人公について、感じたことを発表してください。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分が走ることが好きで一生そのためにがんばってえらい。 ・オリンピックで優勝するのは、たいへんだっただろう。 ② 何が自分の長所だと思っていたのでしょうか。 <ul style="list-style-type: none"> ・走ることが好きだし、他の人より速いからこれが長所だ。 ・とぶことも好きだ。 ・小学生のころから走るのがとくいだっただ。 ③ 自分の長所をどのようにしてとらえたのでしょうか。 <ul style="list-style-type: none"> ・走ることととぶことのどちらもやれると思ったが、先輩の指導により、自分を見つめなおした。 ・走ることが好きだが、好きだけでなく、失敗をすることで自分の長所を伸ばす方法を見つけ去った。 ・野口先生の助言で、とぶ道ひとすじにしよう決めた。 ④ 織田さんが長所を伸ばすことができたのはどうしてでしょうか。 <ul style="list-style-type: none"> ・自信をつけると、跳躍場の虫となって努力した。 ・理にかなった練習をすることが必要だとわかった。 ・オリンピックに優勝するという目標に向かって努力を重ねた。 <p>(3) 自分の個性や長所をどのように伸ばしたらよいか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の特徴を考え、自分をよりよくしようと思ったことがありますか。 <ul style="list-style-type: none"> ・平泳ぎができるようになって、もっとうまくなりたいと思った。 ・作文を書いたり話を作ったりすることが好きだから、もっと本を読んで作家になりたいと思っている。 <p>(4) 教師の「自分の長所をどう生かそうとしてきたか」についての話を聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・性格的な面や〇〇が上手であるといった二つの面から自分を見つめさせ、ねらいとする価値にかかわる意識がもてるようにする。 ・感想を話し合う中で、共通の問題意識がもてるようにする。 ・大まかに三つの場面で、それぞれ自分の特徴をこれだと絞っていく織田さんを感じとれるようにする。 ・常に自分を高めようとする心と、助言してくれる周りの人たちの指導を素直に聞いた織田選手の心の広さに気付くことができるようにする。 ・がむしゃらに努力するのではなく、理にかなった練習法で自分の特徴を伸ばした織田さんの姿に気付くことができるようにする。 ・自己の生活を振り返ることで自分のよさに気づき、課題がもてるようにする。 (心のノート P26~33) ・教師の話聞き実践意欲を高められるようにする。